４　果　　樹

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） ○普通うんしゅうみかんの収穫 ○越冬中晩柑類の防寒・低温・鳥害対策 ○いよかんの収穫 ○越冬病害虫の防除 ○かんきつの樹勢回復 ○落葉果樹の基肥施用 １か月予報では、気温は平年並みで晴れの日が多く降水量が少ない見込みであるが（11 月 20 日高松地方気象台発表）、予期せぬ寒波の襲来で、積雪や低温による大きな被害を受けることがあるため、気象情報には十分注意して作業を行う。
（１）普通うんしゅうみかんの収穫	12 月は普通うんしゅうみかんの収穫最盛期を迎える。果実分析、食味調査を行い、着色や糖度、クエン酸含量を確認してから分割採収を行う。成熟が早く、浮皮になりやすい外成り果や大玉果から先に採り、残した果実は着色状況などを確認して収穫する。腐敗果の発生防止のため、降雨等で果面が濡れている場合は採収を避ける。ハサミ傷を付けないよう果実は丁寧に扱い、鳥や害虫等による被害果の混入にも注意を払う。 採収後は、着色向上と減酸、腐敗果発生防止等のため、風通しのよい場所で、果皮が弾力を持つ程度に、減量歩合２～３％（貯蔵する場合は３～５％）の予措を行う。
（２）越冬中晩柑類の防寒・低温・鳥害対策	越冬栽培を行う「不知火」「清見」「せとか」「甘平」などは、寒害と鳥害防止のために袋掛けを行う（写真１）。袋の種類には、紙袋やサンテ等があり、紙袋は果実の保護に効果的だが手間がかかる。一方で、サンテは省力的だが、寒風や降雨による果皮障害の防止効果はないため、目的や品種による使い分けが必要である。 写真１　果実の袋掛け 「せとか」では、着色後に退色防止の黒サンテを用いるのが一般的であり、「カラ」（南津海）のように果数が多い品種ではネット栽培を行うことで鳥害を回避する。

項　　目	作　　業　　内　　容
	さらに、寒風を防ぐため、防風垣や防風ネットを設置し、冷気の溜まりやすい園地では、防風垣の下枝を処理して冷気を逃がす。 冬季は園地が乾燥状態になりやすく、樹体からの蒸散が盛んになると落葉を助長することから、乾燥状態が長く続く場合には、晴れた暖かい日の午前中にかん水を行う。
（３）いよかんの収穫	ア　適期収穫 12 月中旬頃から始まるいよかんの収穫は、果実が完全に着色してから行い、着色の早い外成り果から分割採収する。着色の遅い内成り果は１月上～中旬頃まで樹に成らせておき、果実品質の向上を図る。収穫後は園地ごとに着色・階級別（小玉・大玉別）に選果を行い、貯蔵する。また、３Ｌ以上の大玉果は、す上がり果の恐れがあることから区分採収・貯蔵し、早期出荷とする。 イ　果皮障害の発生防止 収穫直前においては、降雨後の寒風による果皮障害の発生に十分注意する。気象情報をこまめに確認し、過去に果皮障害の発生した園地では、寒風が吹く前に、樹冠外周部の着色良好な果実を先に採収する。被害を受けた果実については、貯蔵性が劣るため区分して貯蔵する。 ウ　予措 分割採収した果実は予措を行い、出荷時期に応じて貯蔵する。貯蔵庫内が過湿にならないよう適正な入庫量（0.8～1.0 t/3.3㎡）を守り、朝夕に換気を行うことで、10℃～12℃で管理する（表１）。 表１　いよかんの予措・貯蔵管理

出荷時期	予　　措	貯　　蔵
１～２月	日　　数　15 日間 温　　度　10～12℃ 湿　　度　85%以下 減量歩合　３～５%	温　　度　８～９℃ 湿　　度　85%程度
３月	日　　数　20 日間 温　　度　10℃ 湿　　度　80%以下 減量歩合　５%	温　　度　６～８℃ 湿　　度　80～85%以下

項　　目	作　　業　　内　　容
（４）越冬病害虫の防除	かんきつ類の越冬病害虫の防除時期であり、マシン油乳剤（95%）を散布する。冬季のマシン油乳剤の散布は、カイガラムシ類だけでなくミカンハダニにも効果的であり、春以降の発生を少なくする。散布時期は、うんしゅうみかんでは収穫後１週間程度経過した 12 月中旬～１月中旬、収穫の遅い中晩柑類では２月下旬～３月中旬、落葉果樹では落葉後から厳寒期までとし、使用基準に基づき散布する。 落葉果樹の越冬害虫に対する薬剤については、マシン油乳剤と石灰硫黄合剤中心であるが、石灰硫黄合剤は、ももにおける縮葉病などの病害に効果がある一方で、カイガラムシ類へは効果が劣るので、カイガラムシ類が発生する園ではマシン油乳剤を散布し、石灰硫黄合剤を散布する場合は、１か月以上間隔をあける。散布に際しては、ムラができないように風の弱い温暖な日に実施する。
（５）かんきつの樹勢回復	シートマルチ被覆園や樹勢が低下している園地では、早期に樹勢を回復するため、収穫後に尿素などの窒素主体の液肥を葉面散布する。散布は暖かい日に約 10 日間隔で２～３回行う。
（６）落葉果樹の基肥施用	基肥は、来春の新梢伸長や開花結実、果実の初期肥大促進のために欠かせない肥料であり、次年度の生産性を高めるために施用する（表２）。 表２　落葉果樹の基肥施用基準

樹　種　名	目標収量 (t/10a)	施　肥 時　期	施肥成分量(kg/10a)		
			窒素	リン酸	カリ
かき	3.0	12 月中旬	12	9	8
くり	0.4	12 月中旬	12	8	8
なし	3.0	12 月中旬	11	8	9
いちじく (蓬莱柿)	2.5	12 月下旬	9	16	5
いちじく (桝井ﾄﾞｰﾌｨﾝ)	3.0	12 月下旬	10	12	6

（作成　果樹研究センター）